



もっと気軽にアクティブ・ラーニングを

愛知県警察本部科学捜査研究所の奥山修司さんからバトンを継ぎました、中部大学応用生物学部の石田です。奥山さんには、私が学生のころから共同研究などで大変お世話になっています。学生時代の私は、気分はヘイト・アシュベリー¹とばかりにサイケデリック調の服を身にまとい、その格好で県警本部の奥山さんを度々訪問していました。守衛の方にジロジロ見られ、幾分警戒されている印象を受けたことが、今も懐かしく思い出されます。

さて、この2年間、たまたま全学の教務関係の役職を拝命し、その関係でグループワークを活用した学生向けの研修会を担当したり、協同学習についてのワークショップに参加したりする機会に恵まれました。例えば、前者では、「初年次ピアサポーター²」と称する学生達に対する、グループワークを中心とした一泊二日の研修旅行の担当も経験しました。一行程につき参加学生数は約100人、しかもそれを三行程連続で実施しますので、三日三晩満足に寝ることもできず、肉体的にも精神的にもそれはとてもハードな仕事でした。その業務も含め、苦勞の連続でしたが、一方で、そうした体験の中に、自身の授業改善にフィードバックできる要素が少なくないことに気がきました。今日は、そうした気付きを2点紹介したいと思います。

1. 大クラス講義におけるアクティブ・ラーニング³の導入

30人程度の小クラス講義では、私も課題解決やグループワークなどのアクティブ・ラーニング（以下、ALと表記）を積極的に採り入れてきましたが、問題は100人超の大クラス、しかも化学平衡を主に扱うようなベーシックな内容の授業へのAL導入です。そのヒントが得られたのは、ある協同学習のワークショップに参加した時のことでした。講師の先生は、説明の途中で時々話を休めては、それまでの内容の振り返りや共有を二人一組になって行う時間を設けていました。これは使えるのではないかと思います。早速、翌週からの自分の講義で実践してみました。時折、レクチャーを止めては、1分程度、学生達にペア構成で1) それまでの内容の理解度チェック、2) 質問の準備や3) ノートテイキングにおける漏れの有無の確認などをさせました。もともと私の授業スタイルは学生達との会話を交えながら進めていくものですが、ペアでの振り返り作業の導入により、授業内での学生からの発言や質問が明らかに増え、授業に向かう姿勢も向上したように感じました。

余談ですが、普通、学生たちにペアを組むよう説明しても、なかなか思うようには動いてくれないものです。そんな中、ある「マジックワード」を私が発したところ、全員慌てふためきながら、凄いい勢いでペアを組み始めました。その言葉をこのエッセイの末尾⁴に記載しましたので、そうした必要がもし生じましたらぜひご活用ください。

2. 授業におけるもう一つの目標への取り組み

大クラスになればなるほど、授業中に学生から質問等の発言を引き出すのは難しくなります。これはある先生のお言葉。「歌舞伎鑑賞の途中で質問！と手を挙げる人がいますか？授業中の学生はそれと同じ心境です。」言い得て妙です。そんな折に、グループワークにおいては課題をクリアすると云う目標に加えて、チームワーク力やコミュニケーション力など、課題解決に至るプロセス面を重視した目標もあることを知りました。このプロセス面での目標を導入することができれば、大人数の講義であっても学生からも自然に声の上がる授業作りができるのでは？そこで、学生達には、本授業の目標の一つとして「自分で考え、そして情報発信する力」の向上もあることを説き、そのうえで、時折、授業内容+ α の難易度のクイズを出しては、ペアまたは個人で考え、発表させるという機会を設けました。効果の程はまだデータとしてお示しできませんが、日頃、発言の少ない学生の中から、徐々に手を挙げる人数が増えてきたことは印象深く覚えています。そういう学生が上手に発表できると、授業後には自然とその周りに友人が集まり、「お前、あの問題よく分ったな」という感じで会話が弾みます。学生間で褒め合い、刺激し合う様を見ると、この波及効果が授業内でもっと広がらないかとより一層欲が出てきます。

ALと云えばグループワークや反転授業などを連想するかもしれませんが、上述したように、ほんの些細な仕掛けを講じるだけでも授業の雰囲気は良い方向にかなり変わるものです。見方を変えれば、グループワークや反転授業はあくまで方法であり、重要なのは教員の学生に向かう姿勢。そのために日々、研鑽を続ける毎日です。

さて、次回のご担当は、福井県立大学生物資源学部の平修先生です。ご研究内容の素晴らしさはもちろんのこと、いつもお洒落で、しかも多趣味の先生ですから、今回の内容を心待ちにされる読者もきっと多いことでしょう（平先生、すみません、うっかりハードルを上げてしまいました）。バトンの渡し相手を探している間は、トランプのババ抜き遊びにおける「ジョーカー」をずっと隠し持っている心境でしたが、平先生にはそのカードを笑顔で引いて頂き、本当に感謝しています。それでは、先生、よろしくお願い致します。

¹ ヒッピー文化の発祥地。The Grateful DeadやQuicksilver Messenger Serviceなどの60年代米国を代表するロックバンドの活動拠点となった。

² 上級生が新入生の大学生活をサポートする、本学における課外活動の一つ。

³ 教員による一方的な講義形式とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称（文部科学省平成24年8月28日中央審議会答申より）。

⁴ 「あぶれた奴は私（石田）とペアを組む！俺の相棒になるのだ！」

〔中部大学応用生物学部 石田康行〕